旧石器時代の八ヶ岳山麓

●

中村由克＝野尻湖博物館学芸員

《図Ａの出典》①須藤隆司（1991）　②大竹幸恵（1989）　③堤隆ほか（1987）
④保坂康夫（1989）　⑤⑥戸沢充則・安蒜政雄編（1991）
⑦戸沢充則（1964）　⑧⑨八ヶ岳旧石器研究グループ（1991）
⑩八千穂村池の平遺跡発掘調査団（1986）
⑪長野県埋蔵文化財センター（1992）

旧石器の遺跡群と黒曜石原産地

八ヶ岳の山麓は，旧石器時代の遺跡が多いこと，それらが標高の高いところにも立地することなど，日本の他の地方にはない特徴がみられる．諏訪湖畔の茶臼山遺跡は1952年に発掘が行われ，翌年には山麓各地で旧石器時代の遺跡が確認されるなど，早くから研究者の注目するところとなった．

旧石器時代の遺跡がおおくあるところは，八ヶ岳の東麓と西南麓から諏訪湖にかけてである．おもな遺跡の分布域は，①千曲川最上流の南牧村から川上村にひろがる野辺山原（矢出川遺跡群），②八千穂村の大石川上流（池の平遺跡群），③高根町の惣場原遺跡群，④茅野市の渋川上流（渋川遺跡群），⑤西南麓の扇状地（原村周辺遺跡群），⑥白樺湖の周辺（白樺湖遺跡群，池ノ平遺跡群ともいう），⑦霧ヶ峰の八島ヶ原遺跡群，⑧霧ヶ峰南麓の池のくるみ遺跡群，⑨長門町の鷹山遺跡群，⑩諏訪湖東岸の手長丘丘陵遺跡群，⑪和田峠の和田峠遺跡群，⑫和田村の男女倉遺跡群などである（図B）．

これらの中で，池の平遺跡群（標高1300～1750m），渋川遺跡群（1600m），池のくるみ遺跡群（1550m），八島ヶ原遺跡群（1640m）などの高冷地に遺跡が多く分布することが注目される．このような標高の高い遺跡は，すべて近くに石器の材料となった黒曜石が採集される石材原産地に立地することが共通している．今よりも気温の低かった最終氷期のきわめて厳しい気候条件のもと，しかも高冷地で人類が生活し続けたことはまことに驚異的であるが，この事実は，石器の原材料がいかに重要であったかを物語っている．

約３万年前以降の後期旧石器時代になると，八ヶ岳周辺で産出する黒曜石が，和田峠から関東～中部地方の広い範囲に持ち運ばれていたことが知られている．旧石器時代の段階で，物々交換のような流通機構が成立していたかどうかは問題があるが，八ヶ岳周辺を中心とした黒曜石のネットワークが日本列島の中に存在していたことは疑いない．この観点から最近では，原産地に立地する八ヶ岳周辺の遺跡と，消費地にあたる各地の遺跡との関連性が追求され始めている．

遺跡の変遷と立地

今のところ八ヶ岳周辺での最も古い遺跡は，西南麓の原村の弓振日向遺跡，北麓の立科Ｆ遺跡，霧ヶ峰南麓の池のくるみ及びジャコッパラなどの遺跡である．これらからは，ナイフ形石器文化初期を代表する台形状のナイフ形石器（台形様石器ともいわれる）や局部磨製石斧が出土している（図Ａ）．これらは，およそ3.0万年前から2.6万年前頃と推定されている．

それに引き続く約2.0万年前頃からのナイフ形石器文化の後半になると，諏訪市の茶臼山遺跡，茅野市の渋川遺跡，南牧村の三沢遺跡．高根町の丘の公園第2遺跡など，おおくの遺跡が知られている．図Ａには，三沢遺跡および丘の公園第２遺跡から出土したナイフ形石器を示した．

およそ1.5万年前頃からは，槍先形の尖頭器(両面を加工した槍先)が多く使われる尖頭期文化がひろがった．特にこの文化は黒曜石と結びついて発達しているが，全国的にみても八ヶ岳周辺では最も古くから尖頭器が製作されており，かつこの地域の多くの遺跡がこの時期に属している．図Ａには，鷹山Ｉ遺跡出土のものを示した．

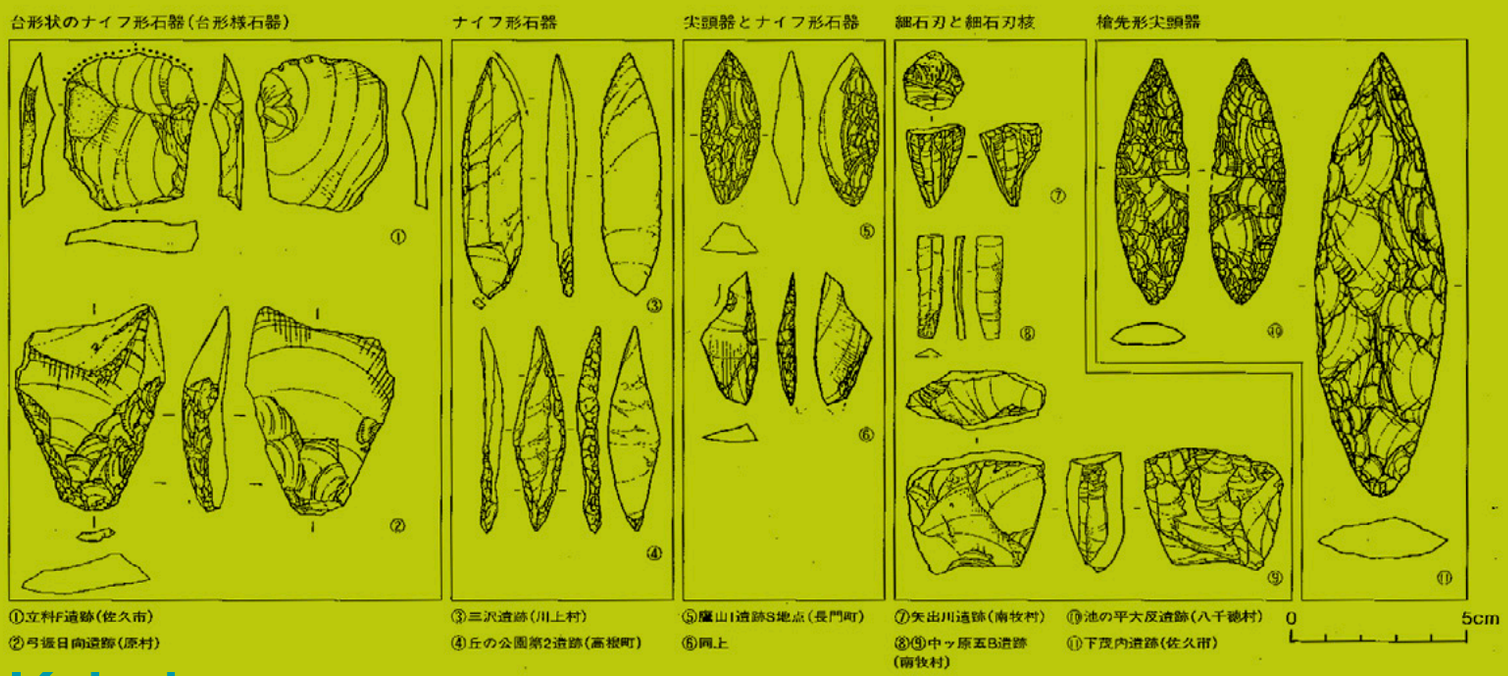
約1.4～1.3万年前には，南牧村の矢出川遺跡や中ッ原5B遺跡をはじめとする細石器文化があらわれる(図Ａ)．これは，小さな細石刃を組み合わせて使用したと考えられている．

その後，旧石器時代から縄文時代への移行期には神子芝文化に属する尖頭器があらわれる．佐久市の下茂内遺跡では，大型の槍先形尖頭器が大量に出土している（図A）．さらに諏訪湖底の曽根遺跡や北相木村の栃原岩陰遺跡などに，約1.2～1.0万年前頃の縄文時代草創期の土器を持つ文化があらわれる．

旧石器時代を通して遺跡は，高原や丘陵，あるいは河川流域の段丘に立地しているが，縄文時代前・中期になると，八ヶ岳西南麓の火山麓扇状地の一帯にたいへん多くの遺跡が集中するようになる．さらに縄文時代の後・晩期をかわきりに，弥生時代以降になると，遺跡は低湿地にも立地するようになる．このような遺跡立地の変遷は，後氷期の段丘形成にともなう環境変化によるものもあると思われるが，それ以上に，狩猟対象の変化，採集から生産経済への変化という経済上の要因によるものと考えられている．

八ヶ岳東麓を源流とする千曲川－信濃川水系には旧石器時代の遺跡群が多く連なるが，この水系に近い野尻湖も含めてこの地域は，ナウマンゾウなどの動物化石が多く発見されていることでも注目される．現状では，ナウマンゾウ化石の年代と多くの旧石器遺跡の年代とは少し離れているが，古くからあった千曲川沿いのゾウの道は，旧石器人が獲物を追った移動ルートでもあったのではないだろうか．そう考えると，日本海側から太平洋側へむすぶ道筋として，八ヶ岳山麓は古くから人類の生活領域の一部分であったことが理解される．

図Ａ－八ヶ岳山麓とその周辺域における主要な石器の変遷



Kubota